

泉州新風土記 泉佐野編 その1

勝 矢 寛 雄

地図を見て直ぐにお気付きになるのですが、泉州地方にはいわゆる観光名所と言うものはありません。泉州地方に京都や奈良に匹敵する文化遺産があるという訳ではありませんが、古い時代からの史跡遺跡又は痕跡と言ったものが数多く存在します。こうしたものを今一度見直して、観光の振興を行いたいと思い、調査を致しました。地元の篤志家の間ではかなりの研究がなされ、彼等の間ではよく知られている興味深い史実も、一般の方々には殆んど知られておらず、親しみのある話として広く喧伝する必要があるように思いました。調査の端緒ではありますが、順不同で漸次泉州の新風土記として紹介致しますので、是非、泉州に興味を寄せて頂きたいものです。

1-1 食野家（めしのけ）

大阪明浄大学の部屋からの眺望は、とても広大で、鎌倉時代の日根荘園を見渡せるばかりでなく、日本で最初の24時間利用できると鳴り物入りで建設された関西国際空港も遠望出来ます。関西国際空港は経済的に地盤沈下している泉州地域で、この地域を発展させる為の起爆剤の役目を担って欲しいと期待されています。江戸時代にはこら辺りは、熊野街道、孝子街道、粉河街道と中世からの街道が縦貫し、いわゆる城下町ではなくて、自然発生的に発達した、数千人の人口を抱える江戸時代の有数の町でした。それらの旧街道は、岸和田市貝塚市とか、泉南市とかではかなり整備がされるようになってきましたが、泉佐野市ではまったく整備されておらず、現在の国道や県道で街道が分断されていて、余程の歴史の勉強に熱心な好事家でないと、その跡を辿るのが難しいような状態です。泉佐野市の沿岸部の、この中世の交通の要路から一つ折れ曲がると、古くて傾いた家屋が密集

していて、自転車ですら通り難いような狭い路地があちこちに通じている地域があります。この地域に隣接して南の端の一带には、広大な敷地の屋敷の土塀が続いていた跡と言われる土塀が少し残っている所があります。ここに江戸時代の資産家を東西番付表にした資料の大関にその名を連ねている大金持ちの家があったのです。

今では大関の上に横綱がありますが、この番付表の最高位は大関です。即ち、西の大関の食野佐太郎の屋敷です。そして、東の大関は三井八郎左衛門で、因みに和泉屋吉右衛門は前頭三枚目、鴻池善五郎は前頭七枚目です。1762年（宝暦11年）食野家は幕府の財政再建という事で、鴻池家と並び徳用金5万両を徳川幕府に上納している大金持ちです。食野家から借金をしていた大名は数知れず、一説によりますと50余藩に及ぶと言うことです。こうした大名の内での名の知れた大名の名前を列挙しますと、出羽国佐竹家、加賀国前田家、尾張国徳川家、筑前国黒田家、肥前国鍋島家等々です。更には、公家では有栖川宮家も食野家から借金をしていました。

井原西鶴の著作に「日本永代蔵」があります。その中に、大阪の豪商として、唐金家の名が出てきます。この唐金家と言うのは、食野家の縁戚に当たり、学術的な研究おいても、食野家と唐金家とが常に混同されている間柄で、井原西鶴は食野家と唐金家をモデルにして「日本永代蔵」を書いたと言われています。飯野家の所有していた千石船の名前が「大通丸」で、小説の中では「神通丸」となっています。

唐金家の跡にはまだ土塀の痕跡が残っていて、豪邸を偲ばせますが、食野家の屋敷跡は明治8年に小学校となって、今では残っていた敷地の一部の石垣が少し残っているばかりで、小学校全体が屋敷であったと昔の栄華を偲ぶしかありません。江戸の貞享時代（1680年代）泉佐野には食野家の屋敷がずらりと並び、その面積は

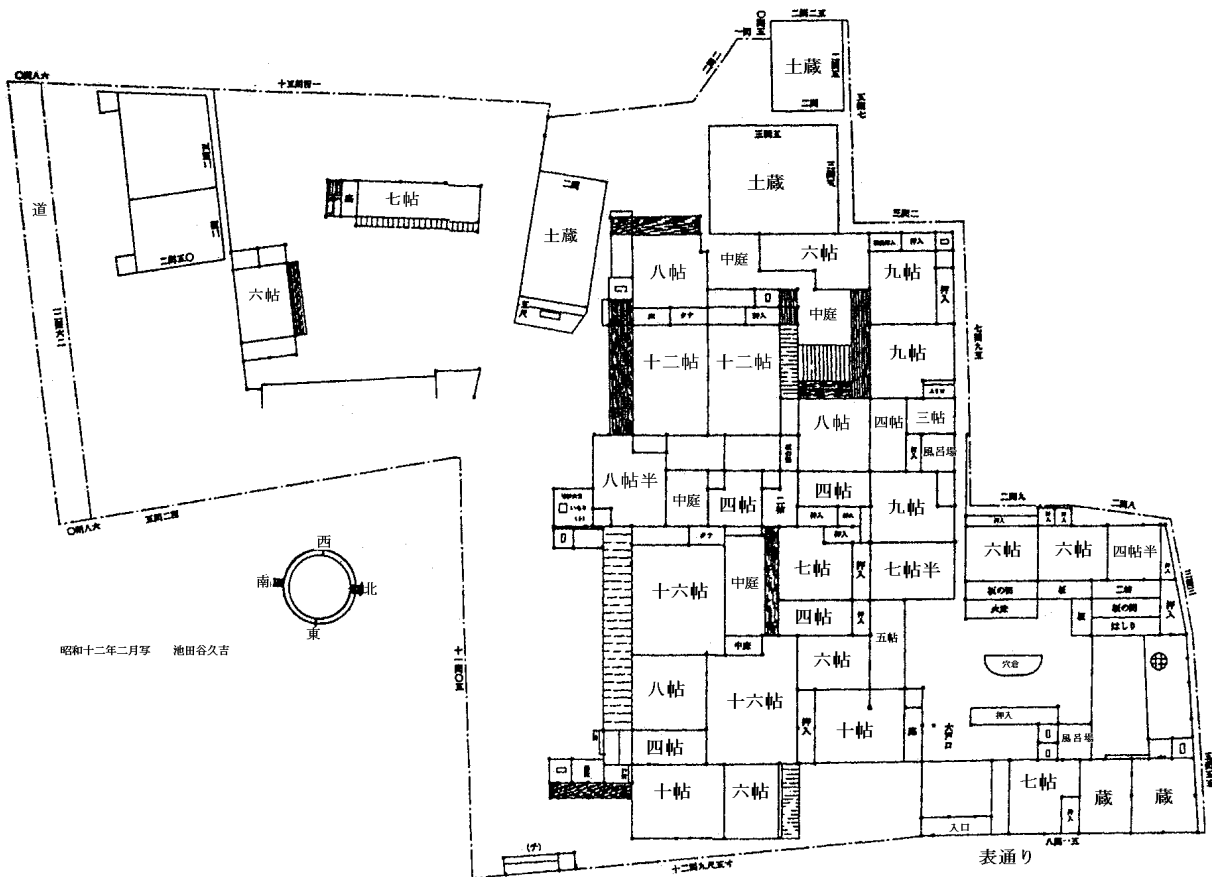
2000坪にもなっていたということです。天保12年に作成された大阪堀江（西横堀側の西で、道頓堀川の北側の地区）の地図は現在の汐見橋の辺りを描いています。この地域には江戸時代に蔵がずらりと並んでいた所です。100有余の敷地は大きく和泉屋と食野家と唐金家に所有されており、その大半が食野家と唐金家に所属していました。

こうした大金持ちの豪商も大名からの次々の借金の依頼を、上手に断る事が出来なくなって、江戸時代末期には400万両にも達する莫大な貸し金を保有する事になったのです。そして、やがては明治維新を迎え、これらの貸し金は全て、貸し倒れになってしまい、没落してしまいました。

明治時代に没落した食野家では家宝は勿論のこと、家屋敷から什器にいたる物まで売却されてしまい、この繁栄を偲ぶことの出来るのは、いろは四十八蔵と第一小学校の敷地と一部の土塀石垣だけで、古文書等に興味のある篤志家が専門書によって、こうした由縁を知るのみです。こうした豪商について、近年では小説の題材として取り上げられるとか、テレビで放映されるとか、されて

いないので、泉州の人々は、泉佐野市の市民ですら、食野家や唐金家の事を全く知らない人が殆どなのです。最近、この食野家の床の間だけを移築した邸宅があると聞き及びましたので調べますと、そこは近隣の市の鉄工所経営の方の所有で、その邸宅を迎賓館として使用されておりましたが、現在は売却に出されておられると言うことで、非公開なので見ることは叶いませんでした。今では、第一小学校の校舎の陰に、借金を踏み倒された恨みから今も世を拗ねたように、一メートル足らずの小さい石碑さえもが背を丸めて、世間に背を向けているようなうしろ姿を、見せています。「食野宅跡」と刻まれたこの石碑は校舎の方を向いているし、今では小学校の警備も厳しいので、校庭には入れませんから、本当に小学校の垣根越しに後姿しか見る事が出来ません。

(参考図は、泉佐野市史研究 第8号 2002年3月号より引用。昭和12年、池田谷久吉氏が古図面を写して作成。本稿では読み難い一部の文字を修正した。)



佐野食野邸平面図（池田谷氏図）

1-2 いろは四十八蔵(いろはしじゅうはちぐら)

弘法大師が作ったと言われる和歌に、「いろはうた」と言われるかな文字の四十七文字に「ん」を加えては48文字を、いろは四十八文字と言います。昔は、小学校でかな文字を学習する最初に「いろはうた」を憶えていました。そして、ものを数える時の出だしに、いち、に、さん、と数えるのではなく、い、ろ、は、に、・・・と数を数える事がよく行われていました。そうした慣習から、48あるものに「いろは〇〇」と名が付けられるようになりました。さらに48と言うのはかなり沢山の数ですので、厳密に48あってもなくても、沢山あると言う意味で「いろは〇〇」と言われるようになりました。

48の数を丁度と言うことでは、大阪道頓堀に料理茶屋とか芝居茶屋とか女茶屋とかいろいろ茶屋がありました。今で言う喫茶店に相当する茶屋で、主にお茶を給する水茶屋が48軒ありましたので、道頓堀のいろは茶屋と言われました。日光の馬返しの坂には、カーブ地点が48ヶ所あるので、いろは坂と名づけられているということです。

沢山という意味では、三重県名張市の名張川の上流の赤目溪谷には、赤目四十八滝と言われる滝の名所があります。名前のついている滝は22滝なのですが、名張川が増水すると、滝の景観と言えぬ滝が100を超える数も出現するそうで、まさに四十八滝と名の通りの滝の名所です。相撲の決まり手も四十八手と申しますが、現在では82手の決まり手が決められています。江戸時代の後期には、300手もあったということです。

泉佐野市には、江戸時代の豪商食野家が所有していた蔵が、海岸一帯にずらりと建ち並び、威容を誇っていました。その数が48棟にも及びましたので、いろは四十八蔵といわれました。正確に48棟の蔵があったと言う事ではなくて、一説によるともっと沢山あったと予測されると主張する人もいます。昭和20年と申しますから、第二次世界大戦の真っ最中に蔵の数を数えた記録があり、その数は34棟です。現在でも数棟程の蔵が残されています。又、蔵が建っていたと言う土台の石を蔵の跡地として認知出来る場所が10ヶ所程度存在します。

蔵は四面を漆喰で塗り固めた壁面を持ちますが、この壁面は石の土台の上に構築されましたので、注意深く観察しますと、昔、蔵の建っていた場所には石の土台がまだ残っている訳です。泉佐野のこのいろは四十八蔵を調べている人に話では、そうした石の土台の痕跡を今で

も、40ヶ所位数える事が出来るとの事です。

江戸時代には、穀物、商品、家財などを火事や湿気やねずみから守る為に、沢山の土蔵が建てられました。大正12年(1923年)の関東大震災の時に東京の土蔵は殆ど崩壊し、土蔵は地震に弱いと言う事になってから、建築されることが少なくなり、最近では生活様式も変わりましたので、土蔵が建築されることは無くなってしまいました。

泉佐野のいろは四十八蔵は食野家の隆盛ぶりはもちろんのこと、江戸時代の佐野の繁栄ぶりを伝えてくれる建物です。このいろは四十八蔵についての昭和20年の調査の地図を見ますとその大きさは、土蔵なんか大体同じ大きさではないかと言う予想に反して、非常に大きなものから小さいものまで、いろいろな大きさのものが残っています。残っている蔵の内部は現在はコンクリートの床に、一部には中二階の段が構築されているものもありますが、柱の疵跡等の様子から想像するとこうした蔵が建築された当時には粘土と石灰で固めた床のほかは全くのガランドウであったと予想されます。柱にはいわゆるほぞ穴のような加工した部分が全く見当たらないことから、こうした予想が出来るのです。しかし、大きな蔵になりますと現在の住宅の三階建て以上の高さがあり、道幅が一間程度の狭い路地にこうした巨大な建造物の土蔵を何故建築する理由があったのか、よく判りません。建築方法も判らなければ、その利用方法もよく判らないし、具体的にどの蔵に何が貯蔵されたのかも、今では判らなくなってしまっています。残っている蔵の一部はつい最近までタオル工場、倉庫などに利用されていましたし、今でもこの蔵を住居として利用されておられる方がいます。

食野家が繁栄したのは大体350年程前から明治が始まる頃までですが、今の蔵とか、蔵跡地の所有者は、勿論食野家ゆかりの方々もおられますが、殆どが必ずしも食野家ゆかりの方々と言う訳でもなく、こうした利用方法やそれから不思議な事に食野家から払い下げられたと言う証文も、何処にもまだ発見されていないそうです。

不思議な事はまだまだあります。食野家は春日出新田を開発し経営していたし、また回船問屋として、現在の汐見橋(昔は唐金橋と言った。)に沢山の倉庫(土蔵)を持っていたし、大阪に数ヶ所の大邸宅を持ち、泉佐野に本宅(現在の第一小学校敷地)を持っていたのですが、何故、沢山の土蔵を泉佐野に持つ必要が何故あったのか良く判っていません。岸和田とか、貝塚とかは勿論の事、日本の中を見渡しても、江戸時代に、江戸や大



いろは四十八蔵の一例

阪を除いて、こうした土蔵の密集した地区と言うのは、泉佐野にしか存在してなかったようです。岩手県江刺市は500メートル四方に約100棟程の土蔵がある町として有名ですが、これらは明治時代に建築されたもので、江戸時代300年前まで、廻れる訳ではないようです。

泉佐野のいろは蔵は江戸時代の貴重な文化財ですが、すべて個人の所有で、文化財登録がなされていません。現在の所有者の方々は、いろは蔵の文化財としての価値を十分にご承知なされておられますが、又一方では、いろいろな事情の下で取り壊されつつあります。残念なことに、ここ数年で消滅するのではないかと懸念されています。

1-3 佐野の盆踊り

佐野の盆踊りは、「岸和田のだんじりか、佐野の踊りか」と言われたように、戦前は非常に盛んで、近郊は勿論、和歌山や大阪からも佐野の盆踊りを踊りに、大勢の人々が盆踊りの季節には佐野にきたものです。その頃には南海電車も、そうした人々の為に、朝まで終夜運転をしていました。昭和42年でも、終電車の時刻が午前2時であったと言う事です。

現在、8月第1日曜日に「郷土芸能の集い」が催され

ており、市民総出で佐野踊りが踊られるほか、市内周辺部の多くの集落（平成17年20ヶ所）で踊られます。殆どの地区は8月の14日と15日に行われ、14日15日16日の三日間行う所もあります。日にちがずれて、南長坂町では、平成17年には8月6日に行われましたし、西佐野台町と佐野台町の合同の盆踊りは、9月9日と10日に行われ、今でもほぼ一ヶ月間、佐野では盆踊りを楽しめます。

佐野の盆踊りの殆どが佐野くどきと言う口説き節に合わせて踊られるものです。ゆっくりしたリズムの踊りで、お月様を仰ぐような形で右手をかざし、左手をかざすのですが、右手をかざすのが一回左手をかざすのが三回と非対称な形の踊りなので、慣れない内はちょっと面食らいます。三味線、胡弓、太鼓の演奏もすばらしいもので、見物するだけでも結構楽しいのですが、この踊りを優雅に踊るのもよく、女声の囃子で雰囲気盛り上がります。

仏教はインドに始まり、中国に渡って広く信仰されるようになりました。仏教はその中国から日本に渡りましたので、日本では仏教の教えは漢文で書かれています。そして、この教えを判り易いように日本語に翻訳したものを和賛と言います。この和賛にリズムをつけて仏教の教えを広めたので、このリズムをつけた和賛を、単に和賛と言うこともありますが、一般的には、リズムをつけた和賛のことを御詠歌と称します。

御詠歌は仏教の有難いお教えにリズムをつけて語っているのですが、仏教のお教えではなく、単なる物語りにリズムを付けて語られるようになり、これが口説き節と言われるようになりました。このリズムは七・七・七・七とか、七・五・七・五と言うように四句を一単位としたもので、八木節とか、相川音頭とかが口説き節の代表例と言われています。佐野くどきもこうした流れの中で生まれてきたものと考えられます。

佐野くどきと言われ、盆踊りが行われる様になったのは、紀州の殿様が参勤交代のおりに佐野村の豪商食野家に立ち寄った時、殿様を楽しませる為に、食野家の庭先で家の娘や手伝いの女子に佐野踊りを踊ったのが始まりとの説があります。しかし、1700年代の中頃に、食野家が西本願寺の阿弥陀堂やお茶所の材木を寄進しましたし、又、飛雲閣の修理を行い、佐野から京の都に沢山の人々が上りました。西本願寺と言え、浄土真宗の総本山であり、御詠歌が盛んに唱えられていました。佐野から上ってきた人々は御詠歌を習い、佐野に持ち帰ったのでしょう。そうした人々の唱える御詠歌のリズムに、食

野家の繁栄を喜び称える物語をのせて、食野家の庭先で盆踊りとして踊られたのが始まりと考えるのが自然のように思います。そして、勿論、紀州の殿様がお立ち寄りになられた時には、踊りを披露したでしょう。とにかく、口説きの物語には、食野家の出世物語が数多くあり、古くから伝わる口説き節です。

その一例として、昔話佐野の浦の一節を所々要約して紹介すると次になります。

イヤヤー ソーイチャエーエエ ソーイチャーエー
ソーリヤー (チキチンテンシャン)
ソーリヤー トコドッコイショー

と言う囃しで始まり、三味線、胡弓、太鼓の演奏に合わせて、音頭取りと言われる唄い手が口説きを語ります。

今は昔の物語 紀伊の国からなにわへと 通うミカンの船の旅 略、 左に見ゆるは名も高き 千鳥の通う淡路島 右にぞ見ゆる山々は 葛城山の長き峰 略、まわり灯籠の船の旅 近き景色はくるくると 移り変わって佐野の浦 海の上より見渡せば 十数町も家並び 浜辺に並べた大小の 船の帆柱数知れず 村の栄えを物語る 親は佐野を指差して 浜辺に見ゆる白壁の 蔵立ち並ぶあれこそは 和泉の国の長者なる 食野の蔵にてその数も いろはで四十八蔵と 村の栄えに輪をかける 食の栄えに村栄え 右手に見ゆる松原は 風光明媚の羽倉崎 略、

と、このように佐野が非常に栄えていた事を物語っています。古くから伝えられた口説き節に加え、大正時代、昭和の初期には新作ものの口説き節が盛んに作られ、今でも新作の口説き節を作って披露する方がおられます。

音頭取りの口説きが終盤に差し掛かると世話役は金子の入った祝儀袋をぶら下げた笹を音頭取りの帯に挿して、祝儀とします。最近の相場は多分 1000 円ではないでしょうか。人気のある音頭取りは盆踊りの日には彼方此方の地区からお招きがあり口説きを語り回るのに、大忙しの日を過す事になりますし、どっさりご祝儀を手に入れる事にもなります。口説き節を聞いていても、慣れない内は殆ど何を物語っているのか、聞き取れませんが、世話役が話しの終わり頃になると笹を帯に挿すので、この物語も終盤に入ったのだなと見ていて判ります。

佐野の町は、このように江戸時代には非常に繁栄した

のですが、この繁栄は食野家を始めとする町民の活動による繁栄で、口説き節も自由な雰囲気の中で発展して来たようです。ですから、食野家の出世物語のような物語ばかりではなく、色っぽい物語も多かったようです。それも色っぽいを通り越して、かなり刺激的な直裁的な文言で、とてもではないが人前では口にし難い文言だったそうです。

大正時代までは、食野家のある佐野の町場の踊りでした。佐野の周辺の長滝、田尻、日根野、上之郷、新家等では、明治までは京節が踊られていました。佐野くどきが、大正時代に爆発的に人気が出て、こうした地区でも佐野くどきが踊られるようになり、泉佐野市内だけでなく、貝塚熊取でも踊られるようになりました。大正時代から昭和 20 年代にかけて、佐野くどきが爆発的に流行したのは、こうした刺激的な口説きの物語を楽しめる上に、泉州地区でタオル工場が、多数操業されていたことに起因しているようです。タオル工場では多数の地方からの女子の従業員を採用していたので、こうした盆踊りには、こうした人々と近づきになる良いチャンスと言うことで、近郊の町町から多くの若者が押しかけました。50 歳代後半から 60 歳代、70 歳代の方々で、心ときめかせて、こうした盆踊りに出かけた時のことを懐かしむ話も沢山あります。

2003 年 (平成 15 年) に発刊された「佐野おどり」と言う冊子には、昭和 21 年 (1946 年) に、佐野の先進的な人達の集まりで佐野文化協会が、佐野の郷土文化の花形である佐野踊りを正常化し、佐野踊りの品位向上を目指して、学校の場でも、娘さんや子供の前でも音頭が取れるような健全な唄の言葉を選んで、正調佐野くどきをひろげようと言う運動を展開されて、今日に至っています。冊子には口説きの物語が三十七話掲載されていますが、この冊子は最近発行されたものですので、刺激的な色っぽい話と取り立てて話すような場面のある物語は掲載されていません。

佐野の人々のだれしもが参加して踊る盆踊りを一まとめにして佐野くどきと称されますが、これは必ずしも正調佐野踊りではなく、踊りやすく簡略化した踊りです。その上、地区毎にかなり踊り方が異なり、大木地区の踊り方は京節の踊り方を留めていまし、中庄地区の踊りも佐野くどきですが、リズムや踊り方は町場で踊られる踊り方とはかなり異なっています。湊の地区でも佐野踊り佐野くどきとは申しますが、湊節と言ってやはりリズムも踊り方も少し異なります。

現在、佐野の盆踊りの殆どは佐野くどきを踊ります

が、合間に河内音頭や花笠音頭、炭坑節等を踊る地区もあります。又、檜井西町ではさんや踊りを踊ります。大正時代昭和時代の初期には盛んな佐野くどきでしたが、今では隣接している町町では殆ど佐野くどきは踊られておりません。熊取町では河内音頭や横山音頭が踊られていますし、貝塚で主に踊られるのは貝塚さんや踊りです。

1-4 干鰯 (ほしか)

元禄時代(江戸時代中頃)には適地適作が各地で進み主産地が成立していきます。綿は摂津・河内・三河・瀬戸内沿岸。桑は上野・武蔵・甲斐・信濃。麻は下野。藍は阿波・安芸。紅花は出羽・陸奥。菜種は美濃・近江・山城・河内・筑後・大隈。楮は土佐。漆は会津。煙草は薩摩・筑前。茶は山城・駿河・近江。甘蔗は讃岐・大隈。葡萄は甲斐。そして蜜柑は紀伊が大主産地となってきます。泉佐野市を含む泉南地域は江戸時代初期から全国的に有名なワタ栽培地域で、和泉木綿が盛んに生産された地域です。特に海岸地帯ではワタの作付けがさかんで、稲作に匹敵する栽培面積に達していました。泉南地域で収穫された綿花は良質の白木綿を中心とする和泉木綿として布に織られました。このワタ栽培には、ほしか肥料が欠かせないものでした。

ほしかは、一般的に鰯から油をぬいたもののことを言いますが、鰯をそのまま干した浜干鰯と煮干鰯がありました。煮干鰯の作り方は、水揚げされた鰯を水切りした後、沸騰した釜に入れ10~15分間煮つめます。煮えた鰯をおおかごにすくいあげ、上から板で押えつけて、さらに大きな石を置くと、その下の桶に搾り出された油が採取出来ます。しほりかすの鰯をむしろに広げ、天日に2~3日乾燥させて作ります。泉州の各浦にはこのような干鰯を作る浜、いわゆる鰯干浜と呼ばれていた浜が沢山ありました。私が泉佐野に住み始めたのが、千里の丘陵地帯で大阪万博が開催された頃の約30年前です。もうこの頃には泉州地域ではわた栽培は行われていませんし、和泉木綿と言う言葉も死語になっていましたが、鰯は大阪湾で、まだ大量に漁獲されていました。現在では、海岸線が湾岸高速道路よりもかなり西側になっていますが、30年前は、この湾岸高速道路の辺りが丁度海岸線で、鰯の浜干しが盛んに行われているのを見かけることが出来ました。そして、浜では浜干しが盛んですと、その臭いがとても強く、浜の方に近づきますと浜特有の臭いが漂っていました。

江戸時代の初めは、大和 河内 摂津の国々が、日本全国有数の綿花の栽培地域で、泉州の浦々のほしかでは供給が間に合わず、九州の周防灘に面した海岸や千葉九十九里浜、房総半島にほしかを求めました。このように、ほしかは肥料として、非常に有効でしたが、お金で購入しなければならなかったのが金肥と言われるようになりました。浜干しをしている人々やほしかを商っていた人々は、金肥で豊かな収入がありましたが、この臭いが身体にも染み込んでいましたので、町に出歩く時はかなり肩身の狭い思いをしなければならなかったようです。

先祖がほしか業を営んでいた方の話では、昔は苗字帯刀を許される身分でだったそうです。屋敷も広大で、別荘ですら女子の手伝いの部屋を含めて、大広間など十室を越えるものであったそうです。江戸時代には、岸和田藩の家臣の家から嫁を貰い、塗りの駕籠に乗ってやって来たそうです。その上、槍や薙刀を嫁入り道具として携えてきたとのこと。ほしかの為に、いろは四十八歳の並ぶ中の三つを所有し、その蔵にほしかを収納していたということです。昭和16年頃、ほしか業は、政府が管轄することになり、呉服屋や織屋と違って家業を続けることが出来なくなり廃業させられたということでした。

明和8年(1771)の「関東鰯網来由記」と言う江戸干鰯問屋に関する由緒書には、ほしか問屋を営む者として、加田屋助市、栖原屋久治郎、栖原屋三九郎、栖原屋文治郎、湯浅屋与右衛門の名が見え、加田は加太ですし、湯浅は湯浅で、栖原は湯浅の栖原であろうと推察出来ますから、屋号だけからでも推察できる紀州出身者が数多く居たようです。最近、大阪湾の水も少し青味を帯び、綺麗になって来たようですが、ついこの間までは、茶色に濁った水しか見えませんでした。この大阪湾は、江戸時代には豊かな海で、ここで発達した漁業を営む漁業生活者が関東に進出して、江戸の豪商と言われた人々にもなったということです。

木綿の製造過程で、綿花を紡いで糸に延べ、水に浸してよく炊き込んだ後、色染めをするのですが、この色染めをする家業の人を紺屋と言ひ、泉佐野の隣接の熊取には、紺屋と言う地名が残っています。又、泉州の電話帳には、苗字として、紺屋さんが紺谷さん(元々は紺屋さんであったものが、屋号でなく苗字と言うことで谷の字を使うようになった。)という方も含めて20数軒もおられます。同じく電話帳で、干鰯谷さんと言う方も居られます。いろは四十八歳と言われる沢山の土蔵の中に

も、干鰯蔵と名付けられた、ほしかを貯蔵していたのではないかと推測されるほしか蔵が幾つもありました。しかし、土蔵そのものはもう無くなっていて、ほしか蔵跡と言う地名だけが残っています。

出典

泉佐野市史研究 第8号 泉佐野市史編さん委員会
2002年3月 泉佐野市教育委員会
食野家関係史料 第一集 佐野史談会 昭和25年11月
池田谷久吉
食野家関係史料 第二集 佐野史談会 昭和25年11月
池田谷久吉
食野家関係史料 第三集 佐野史談会 昭和25年11月

池田谷久吉

泉佐野なんでも百科 泉佐野市役所 平成6年3月
特別展 江戸時代の泉佐野 歴史観いずみさの 平成10年4月
佐野踊り保存会 結成50周年記念誌 佐野踊り保存会
2003.7
佐野おどり音頭集 第1集 松本芳郎 1998.8 泉佐野の歴史と今を知る会
泉佐野地域の民謡と盆踊り 松本芳郎 2005.2 泉南歴史民俗資料社
名数絵解き事典 南 清彦 2000.1 叢文社
大阪落語名作選 松福亭松鶴 大阪新興出版社
堺・泉州 第7号 堺泉州出版会 1999年10月